

未来の仏教と私の役割

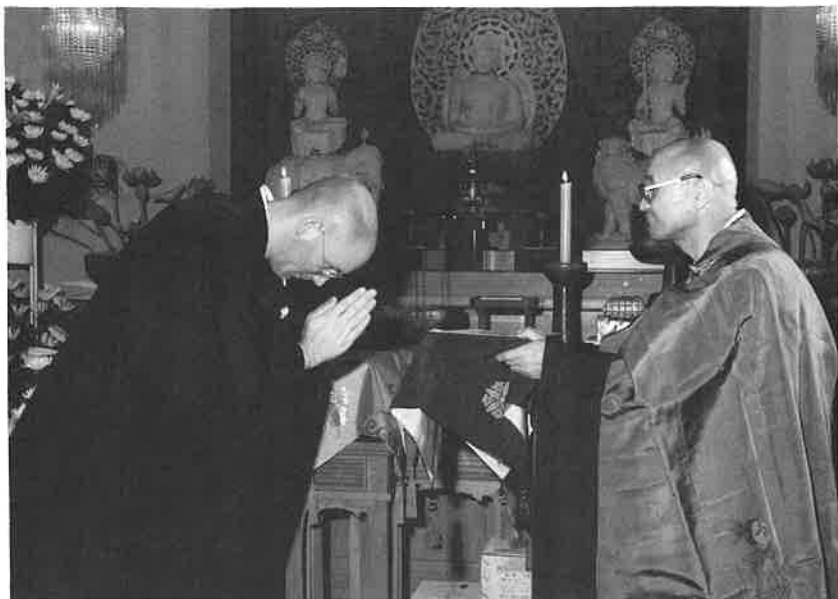
ペルキ・ローフ（大玄）

（米国人）

ソ連邦消滅をあなたはどのように考えていますか。いろいろと取沙汰されています。たとえば、「偉大なる革命者ゴルバチョフは、共産主義を救う試みを、先を急いだばかりに崩壊の引き金をひいてしまった」と。だが、私は物質的なものを根本とする唯物史観の終焉だと考えています。アメリカ合衆国も似たようなものです。麻薬とホームレスが、はびこり広がっています。その反面、博士号取得者や大金持ちの人々が、

社会的栄誉や物質的栄華の虚しさを実感して、禅に心をむけています。が、アメリカンドリームはすでに昔話であるし、再びモンロー主義が出てきそうです。

ルターの宗教改革を申すまでもなく、宗教のペレストロイカは、その成果を後の世まで伝えます。バラモン教に対抗して興った仏陀の教えは、未来永劫、脈々と受け継がれていくはずで、そう信じて私は出家しました。仏教も、今



まで何度も革命（改革）が行われていきます。部派仏教をはじめとして鎌倉仏教にいたるまで、いくたの正法を求める僧は、退廃してしまつた僧伽を批判し、改革運動を展開してきたのです。私も、日本の僧堂で本物の坐禅を修得して、道元禅師の真精神を、混沌としたアメリカに布教できる僧になりたいし、また授けられた安名に負けないくらいに、大いなる奥深い天なる世界を、この地上の人々に普く与えることを願ひ、仏教の法輪を転じていくことを釈尊に誓つたのです。

私と仏教との出会いは、小学校の五年生の時です。宿題で、好きな国のことを調べて、その内容を作文にすることでした。オリエント趣味からだったのでしようか、日本を選びました。学校の図書館にある百科事典を開いたら、日本をイメージさせる写真が五、六枚載っていました。桜と富士山、芸者さん、ラッシュアワーの

サラリーマン、そして坐禅しているお坊さんでした。この僧のイメージは妙に心に惹かれ目に焼き付いてしまったのです。中学校そして高校に通学するようになって、ますます「日本と仏教」についての興味は募るばかりです。△日本へ行きたい▽お坊さんになりたい▽と思いつながら、口に出すことはできないのです。それは、話したら、家族・友人そして先生だって、当時の環境と全く関係のない「日本と仏教」を考えている私を、アウトサイダーとみなし、ひやかすだけではないかと恐れていたからです。だから、心ひそかに大学は地元のミネソタ州立大学日本語学科と決めていたのです。ちょうど日本語ブームの第一波の波紋がアメリカの中心部まで及んだ頃でありました。皆が私を見て、外務省か日本企業を目指しているだろうと思ったかもしれません。しかし、私はそういう仕事に興味はありませんでした。

大学の授業で、私を仏教の世界に深く引き込んだ古典があります。日本人なら誰でも御存じの『方丈記』です。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。——」この流れるような文章に、「諸行無常・諸法無我・一切皆苦」を読みとれることができたのです。ふと、自分の過去世は、日本の禅僧ではなからうかと思えてきたのです。そうなると、日本に渡ることは目標となり、日本語学習におおさら熱が入ってきたのです。

大学を卒業すると同時に、お金を借り集めて、知人のいる所々を回って来ました。そして、愛知県に就職して、英語教師をしながら禅寺に通い始めました。教育制度の矛盾や自分の努力がほとんど無駄だと感じた私は、教師の仕事をやめよう、国へ帰ろうと思ったところ、横浜の知人から連絡がありました。山手学院という私立高校は外国人の日本語教師を探している、と。

都会をあまり好まない私は、想像していた横浜のイメージがあまりよくありませんでしたが、面接のため横浜に来たら、緑の多さや街のきれいさにびっくりして、是が非でも横浜にきたいと決めました。面接のおり、私が独学していた日本人ならほとんど誰も知らない『寶物集』（鎌倉初期の仏教説話集）を取り出して、国語担当の校長と教頭の前でそれを説明したのが、効を奏したのです。

そして、今回ある僧を介して善光寺に縁があり、方丈様に「弟子になるか」とおっしゃられた時は、天にも昇る気持ちでした。十年來の夢が、実現出来たその夜、アパートで坐禅していても、妙に心が落ち着かないのです。そして、『奥の細道』の「月日は百代の過客にして、往きかふ人もまた旅人なり」の一節が浮かんできたのです。来日してから七年間に、芭蕉をしたって日本の隅々まで旅行しました。祖国アメリカ

カでは禅センターがあるロサンゼルスに一回しか行っていないし、ニューヨークへのおのぼりさんもしない私がと、考えると妙な気持ちになつてきます。

私と逆に、来米されて、いくつかの大学で講義し、日本文化と禅思想を紹介してくださった鈴木大拙先生は、私にとってもかけがえのない読書の師です。日本語訳にもなった『禅と日本文化』の原書を大切に持っており、何かにつけページをめくりました。私の日本名は、鈴木朗夫です。この鈴木の名も、ファミリー・ネーム、ペルクをベルキにして、大拙先生に因んで、つけました。ローフが朗夫になったのは、その漢字の意味が好きで、その発音が合ったからです。残念ながら、私は親不幸者で、朗らかになっても、結婚しないつもりでいるので、夫にはならないと思います。

日本人に近付きつつ、私は常に人間のあり方

を考えています。古典を読むと、日本人の心がしのべれます。たとえば、万葉の人々は、清き明き心を重んじていたのです。この清明さを『万葉集』で自然の形容まで用いたのは、自然が美しいというだけではなく、そこに聖なるものを感じとったからです。清らかで美しい自然が人間の世界にも訪れることは、望ましいことです。その理想の姿を見いだしていたのです。と鈴木大拙は『日本文化と禅』に述べています。

「うつせみは 数なき身なり 山川の
さやけき見つつ 道を尋ねな」

この大伴家持の歌は、『万葉集』のなかで私の好きな歌のひとつです。この心情は道元禪師にも通じていくと思いますが、いかがでしょうか。

現在、問題になっている地球の環境破壊にしても、この心を忘れてしまっているからではないかと、私は考えています。インドネシアの豊穡な森林を伐採しつくし、荒れた国土にさせて

いるのは日本だと報道されています。万葉の人々が、人間を含め、すべての生命の源泉が自然の中にあると信じ、その生命力を賛美し、自然に対して限らない信頼を寄せていた血脈はどこに置き忘れてきてしまったのでしょうか。

『正法眼藏随聞記』には、「日々時々を虚しく過ごさず」と、または『修証義』の「総序」には、「今生の我身二つなし、三つなし」と書いてありますが、私は剃髪をしたので、こういう注意と奨励の言葉を脳裏に置きながら、禅僧らしくと言われるように精進をしたいのです。

旅先の禅寺で、清香を放つ白梅の古木を眺めていると道元禪師の月見の像が浮かんできたことがあります。そして、言いようがない無上の喜びにひたっていたのです。道元禪師の精神世界は、世界のどの宗教、どの哲学も及ばない偉大な思想だと考えています。理屈抜きで行ずることは、人生においてもそうですが、厳しい修

行に耐えられるものにするのです。それがよく哲学には欠落しているが、道元禪師には含まれているのです。

現代です。経済が優越し、工業技術が世界を支配しているのが、人間を個別的・平均的な大衆にしてしまった時代にあつて、道元禪師の実践仏教を展開することは非常に価値あることと考えています。願わくば、「只管打坐」を實踐し、仏教の教えと一体となった安らかな自由と慈悲を会得して、その体験をもって、それらを世界の人々に語っていききたい。

これから大問題となる民族紛争や宗教紛争を、心配するあまり、またアメリカだけでなく、地球全体に仏教の調和の教えである「慈悲」を限りなく伝えたいばかりに誇大にその願望を述べてしまった箇所がありますが、日本の禪僧と

して、つつましく、「一隅を照らす」意味で、道元禪師が残して下さった書物の英訳を校訂していきたいと思います。それが道元禪師から私に与えられた使命のように思われます。

